

常時コスト意識を!!



東部管内青年部 (部長 山本雅陳) は、全酪連の技術顧問・成田獣医を招き「増産への道」と題した研修会を開催した。

講師は「現在、飼料高騰の中で、ど

うすれば儲かるか？」を参加者に問いかけ、「個体乳量が増えなくても必ずしも儲かるとは限らない。常にコスト意識を持つことが大事」と説明を加えられた。主な研修ポイントは次のとおり。

■コスト意識を持つ計算式

「利 益 \parallel 利益や/kg \times 乳量/頭 \times 頭数」

「利ざや/kg \parallel 乳 価/kg $-$ 経費/kg」

■ポイント(一)

飼料高騰時だからこそ飼料効率を考える!

生産費の中では飼料費が一番大きい。例えば育成牛への飼料給与では三ヶ月齢であれば予測乾物摂取量二・七kgに対して増体は〇・八kg/日、同様に十八ヶ月齢の予測乾物摂取量九・八kgに対しての増体も〇・八kg/日。よって、増体比較からは、初期発育への投資効果が高いことが分かる。中には育成飼料を乳配

に変更する人もいるが、初産分娩が一ヶ月遅れると余分なコストがかかることから、コスト抑制のポイントを間違えないことが大事である。移行期も重要な投資期間であり、分娩後の健康、生産、繁殖の確立を目標に、ここでの費用を次の乳期で取り戻すことを心がけてほしい。

■ポイント(二) 何が生産量を制限しているか?

「カウコンフォート」、「代謝病」、「繁殖」、「乳房炎」、「栄養バランス」等の要因は、複雑にリンクするが、これらの制限要因の排除が最初のステップとなる。特に分娩後の給与量の増給方法や、初乳を生後六時間以内に四リットル給与することで、遺伝能力にスイッチが入り、乳量も多く生産されるデータが示されている。

講師は、研修の最後に「牛は現在の環境管理に我慢するが、人のためには無理をしない」とし、多くの質疑応答があった中で、参加者は飼養管理の重要性を再度認識した有意義な研修となった。



酪農窮状を訴え「要望へ」 北広島町との意見交換会

北広島町酪農団体連絡協議会(会長 東方田忍)は、畜産振興をテーマに北広島町との意見交換会を開催し、会員ら24名が参加した。

北広島町からは、産業建設常任委員長のほか、産業課職員ら3名が出席した。まず、町職員から今年度の畜産振興事業の説明を受け、その後に意見交換を行った。会員からは行政に対して「草地の獣害対策として牧柵設置やその駆除」、「飼料稲への助成」、



「米、野菜、畜産一貫の6次産業化の推進」、「酪農関連の補助事業の具体的説明」等の要望を行った。同協議会は、これらの要望をまとめ、町長と議長を訪問のうえ、酪農窮状支援要望書を提出することとした。

酪農現場で消費者交流 酪農体験を通じて関心高まる

甲奴郡酪農組合(組合長 伊達 薫)は、生協ひろしまと第十三回甲奴産地交流会を開催し、生協ひろしまの組合員をはじめ、山陽乳業(株)、甲奴郡酪農組合、広酪から総勢百四十名が参加して消費者との交流を深めた。

当日は晴天に恵まれ、バスで会場に到着された生協の組合員ら参加者を甲奴郡酪農組合の組合員や女性部、青年部が出迎えた。同組合は前日からの会場準備とバーベ



キューやおにぎり作りもあって、中山間地域ならではの「おもてなし」で消費者に喜んで頂いた。

交流会は、伊達組合長の「皆さんこんにちは。今日は楽しんで帰って下さい」との挨拶で始まり、十二班に分かれてバーベキューを楽しみながら、牛乳や牛に関する話題から、野菜や新米のおむすびが「とても美味しい」等の言葉が飛び交うなど和やかな雰囲気です。ペットボトルを使った「手作りバター」体験では、それを松本牧場の奥さんが焼いた多種類のパンにつけて味わう試食会が大変おいしいと好評で、酪農家のお母さん達による地元産の野菜やお米の即売会も大好評であった。

交流会後は、ウイングドームから松本芳牧場に会場を移し、酪農家の説明を受けながら班毎に牛舎を見学したり、ほ乳や餌やり等の酪農作業を少しでも身近に感じて貰える体験活動で酪農への理解を求めた。

閉会では、生協ひろしまの参加者から「甲奴からの贈り物を百二十%売り上げます」と、生産者にとっては大変力強い言葉を聞き、今回の交流会も消費者と生産者のパイプが更に太くなったと感じられる有意義な交流会となった。

さんわ ふるさとフェア

「おいしい」が嬉しい！ 神石三和で消費拡大

神石地域酪農生産振興協議会(会長 河上康則)は地元「三和ふるさとフェア」に参加し、牛乳や乳製品の販売を実施し、消費拡大を呼びかけた。

当日はJ A福山市の職員と協力し、協議会のお母さん方や家族の協力を得て、ヨーグルトや手作りアイス、牛乳の販売を行い、午前中で見事完売となった。

毎年の出店が商品の宣伝効果をもたらしたのか、「今年も楽しみに待ってたんよ」、「このアイスが

食べられて良かった」、「ここのヨーグルトは美味しいよね」など嬉しい声をかけて頂いた。

「嬉しいかけ声」から、今回のイベントは比較的小規模ではあるものの、改めてこうした活動の積み重ねが必ずや消費者に理解され、今後の牛乳・乳製品の消費量増加への後ろ支えになるものと勇気づけられた。